

演題番号：10

大阪府立大学中百舌鳥キャンパスに生息する飼い主のいない猫に対する意識調査

○星 英之¹⁾，吉永享世²⁾

¹⁾ 大阪府立大 人社システム ²⁾ 大阪府立大 現シス

1. はじめに：大阪府立大学中百舌鳥キャンパスでは、2014年から学生団体と地域住民(猫サポーター)が協働で、構内に生息する飼い主のいない猫(以下、府大猫)に対する地域猫活動をしており、2018年度には83匹に不妊去勢手術を行った。本研究では、府大猫に対する地域猫活動を評価する目的で、大学関係者1,200名に調査票を配布し府大猫に対する意識調査を行った。

2. 材料及び方法：アンケート調査は、人間社会システム科学研究科研究倫理委員会の承認を受けた後、2019年12月～2020年1月に行った。調査の対象者は大阪府立大学中百舌鳥キャンパスを利用する教員、職員、学生及び地域住民とし、それぞれ515、399、278及び8票の調査票を配布した。設問は、府大猫の印象、数、迷惑と感じる点、キャンパス内の地域猫活動の認知度及び自由記述とした。自由記述欄に書かれた文章は、テキストマイニングソフトkh coder ver.3を用いて属性ごとに頻出語と記述内容の類似性を解析した。

3. 結果：教員、職員、学生及び地域住民から、それぞれ118(回収率22.9%)、256(同64.2%)、234(同84.2%)及び8(同100%)の調査票を回収した。教員及び職員は学生に比べ、有

意に府大猫への好感度が低く、個体数を多く見積もっており、府大猫を減らすべきと考え、迷惑を感じているという結果が得られた。学内の地域猫活動については、学生団体の活動は、54.7%～61.4%が認知されていたのに対し、猫サポーターの活動は、11.7%～31.3%と低い値だった。自由記述での頻出語では、属性に関係なく「餌(エサ)」が上位に挙げられ、特に餌を与えに来る外部の人物について否定的な意見が多かった。学生は「可愛い」という語が上位に来ており、府大猫に対し好意的な感想が多かった。教員及び職員では、学生からは出てこなかった「カラス(鳥)」という単語が認められており、鳥類との共生を懸念する意見や、置き餌によってカラスが集まるという二次被害を訴える意見がみられた。

4. 考察および結語：学生団体の活動については認知度が高く、学内で受け入れられていると考えられた。それに対し、猫サポーターの活動については、認知度が学生団体に比べて低く、活動内容の改善及び周知が必要だと考えられた。